



1989
34





〜連18
1959
3

男女風れ傳下卷

目録

奢恥おごる ちぢ

田舎れいなか迄まで

浮氣うへ

好れ道このみちへ同腹中どうはらみち

乳母う乳

小宿こやど乃自由ト自由

當風あつぷ

人のあつたて



風傳

卷下

〇

自慚

戒と持女房

蒙古

日本丸威光

田舎

臨終乃一念

文盲

心有原氏の巻

人參

中庸ハ人々黒星

男風乃傳下巻

奢恥

内院の免をあれ十人並に世に口を内恥をあれと
其教限をうごぞ乃而は輕重遠近を人乃前して
的而小恥をこのもべいふ心つた人とも忽ち遠洋の
侍農工商ともは留所なりと見ゆらざる皆其人
乃委と儒上やを虚云との張を出行乃比より真丹波
の者十三も子を京へ奉公もをせに鷹乃のまよ
るは其まらつてつれ布子の上は地着に類の也

中づつよはけし能びつよをいさるるあつて
 と若く釣舟燈を重乃掃除をせしつ中舟はあつて
 江戸乃店さうさしは屋をたれいさふ入幕れ福乃
 神といふも中老よ主人をもちりてさう跡光
 尾すくはら河あせて老の主人を乃余よ又軒
 家屋敷元手銀又すしに給し者たつとすり手代三
 四人子伏乃三人をけくの男世帯を福寺れさう
 ありとせげさうとて書をしうらるる男子生
 余と終よ本絆類をさせどもそとあつて成人さ
 純幸石垣町新橋辺すし祇園町若乃釣舟の縁すと

春の梅のえ香よたつと引舟はさう方の
 心すしとあつて親い子と一跡をゆつとさ
 上すしとさかすうし人乃娘を似合しとて媿よ世
 又奈福ちよ子よ子れ出来さうしに孫い子さうも
 して乳母に抱乳母物坊までおさううて奈後
 立よ預し人とも親親分よと奈見さを見さ
 親り子の奈其子の子の精おさうあけつ上
 芥を思ひ出給うししとあは神祇乃御慮よま
 ひまをせ家乃をさうさけつとにそいたさ
 いさささう云庭ふ出さうし人よ換をうけ子れを孫

まをうれめとんさういふるの恥ぞる。太神宮は神託は右と左
 のまづうの左と右とまづうの右と左と一たいたとせよ
 と教さるのみを中と改さるの事とのや大これ人
 ちるもれ初畧せも成よつと奈いさ思なる事也

○ 淳氣

珠一才半上氣を事しに心るうそを多しゆ人
 乃心音を留所たつと今うそをたおさうそを極角の
 年しよも馬尾と知きて見さ人な能よ可舞妓よ
 入かわく竹田琴より尺八三味線より人あり。空路お

孔子を傍と。田原嗣の安史を聖也ととも類ひ乃
 孫簡遠いせよ。聖徳太子は御叔父崇峻天皇
 と殺し奉蘇我乃馬子と俱よ天を盡其罪をい
 めらむ。天照太神よと教さるのみ神玉乃神道をともて
 新迦法よとあり。好て乃所乃言とあり者
 と悪嫌よの各らと守屋乃天長をあらは。新迦法を
 好極悪乃馬子と睦親の六同氣相表れ外に。太子
 乃山背の王ハ馬子が藤入麻村太長が為よ攻教を
 のひ山背孫七の太子傳は後よ作さる人表好心を傍と
 としげけ太子夢殿よ入て三世を考るのみ。宗神天皇乃

馬子に裁きをせしむるの生乃親らりし故に其相は
 海とよしと太子をよき養育しめんとす青田たむらす
 又太子をよきれ河に流しぬるを乃親もよき縁をせしめ
 きしと宣ふ公昔乃親と対し其まを仙人とすて天
 上へのを信を書愚俗をほらり。乃て同へ方使と
 云方使乃二字をててふを乃親はたむらすと河に正真を宗
 と教させぬ神乃御心にもあふ乃道にあらむも佛法
 乃唐土へまゝしハ漢乃四帝永平四年とこのやの帝
 張て是をいらしめてすは先王宗廟乃孔祭の捨し
 山崎氏いふるも色ぬ

○ 乳母

ある酒やと獨りれ三とら二月を焼つる京中乃
 徳医多を治くして何と病の名を行人とすは
 見舞にまゝ医者色たら色は今ハもや異色しあを
 歩可なり守居るに年月出入も多し娘業色色懐
 中せし医者を伴ひ見ゆらうやが病兒を見せし
 思ひ付まをてま一う洞合し思を思ひら色あも
 枝方見へる人をまらるし暖や見え家元よ一色も
 ことひてぬらぬ何ぞ云はらん一階れ大医達捨ら

見事

卷下

三

ものをいひはひいあつて塵塚として小判びりきり
 みいせあつて母乃親牛尻にても弄くき流連も死な
 者あ終がし獨ちせんせ三四度用ひつる二分
 乃だん乳を汗さる夫婦等々故人橋をこのけあさ
 中何ゆゆ言へりかも早くは見えなかりし色に
 ちるす。夜よ入て彼医者東膝腹と見え茶一拵
 合しうとよびては行何事せり云ん其夜に乳を
 と抱を並臥ありしが翌朝早く医者ハ如らるる乳母
 と呼て傍抱を坐と女房肝をけうこいおは抱あり
 頬ふ肉といひ乳をのませる寂中にと扱きを婦人の

愛とあひまどしく乳母焼けるもいに幸のれ乳をそ
 来と其侍のみつと茶の深才よまろしを十四五日
 まれと申扱せりといや候は行心易れ人乃せらるる
 一の乳母が房かやうが他云とまをちよりきとい
 色一のいと。故人乃心持を成座れするは彼医者手
 前よ酒くまう病ハまよとやゆまらと記さきつま
 終し通寝入するをみて見りにそひ寐せしうむげら
 て返出たしに六七合をへ入れうぐの茶碗を持裏障
 うかひや酒をこもくここのを寐前よ入乳をのませし
 天性をすいんう。小兒あひるすに症をう。内指と見え

酒毒を解し脾胃をそのよき毒とて解しと結毒を
解してねらぬ毒あると我もあつて子をたのせよ
つらばあつとく心を付金の事也一日乃中大きく
日そのあつと迎ぬわらひ小者たよど出来心やそくあつて
美登松茸持し八面を出入ぬき事きき内小者乃嫁
小娘をむね子をつらうをむねひてあつと
さんそく見世の毒毒子よてもあつてふたあつと小者乃
あつとつらあつと毒毒あつとつらひ子なりと
何志んせて大事あつと去年の霜や月よじりて
今年乃益とあつとつらく九月やつらに秋つて乃

はよすつとつらもにをなれやまきつらば
あつとつらもにをなれやまきつらば
あつとつらもにをなれやまきつらば
あつとつらもにをなれやまきつらば

○ 霜風

世の人れ風俗あつと習行中に女工つとつら月を
あつと教を人も必定乃心をめや昔の昔昔昔昔昔
あつとびれあつと乃さき善とねとひつら今れ氣つと
あつと小見つとつら今乃風俗を又習つとつら
あつとつらをたつと見つとつら小袖乃下つと

外折事人のほしまさくはを見之るあまに猶も
乃ちれまきま久采の仙人をわとを合点うび故にや
今こそお乃事し手をはくして横様をばあめひ
荷をささるとるや安くこのことと事あや半まほしくあ
うととまてとさうつとほしひもすく深紅と重あま
でいげおま柔なう下弦を桶色乃堅地は様は後
まををささくせむ川さううとつとつとまてこのや
奈有れ方にくらをやくまのさたる人心ぬれあ保
ゆるまきま昔の布子れよ結を著してくぐいと
アウウウウ其対付に我申一

○ 自慢

自慢とよが十面りく憍氣とよの氣らひいらる
せん心とらがるりく羨まんといはるるに憍慢と
りんはさうりくすもせんの人をあみとるあそをね心
畢育身承云事ささるやあめとの背善と成を立他を
此笑まきうらひ又培上擗とよの魔乃所為して是を
除へ不動のまれ利生とくも母歎怒乃相を現し
火生三昧に入天地虚空を火熾とあし魔外を煖今
を火界の呪をまのまは天地慧火とつると転迦経よ

風ノ傳 卷下

いもてつらつらとて紀述乃承まんの大義一覽よせ
 終に下生ご乃一手天を指一手地を指周行とてま
 七歩四方を顧と曰天上天下唯我獨尊と云と一八九三
 國一乃慢小あつとる後世おつとるや雲門乃曰承當初
 若見ハ一捧よ亦教狗子よあつと突せつと天下太平と
 要とんとと貴と云と器量いもつと乃紀述に恥と
 不動乃心よと入すれ事也又不動乃細すとて天地悉火煙
 とたつと魔界れと無限と去處も亦處も粉灰とつと
 和漢の記録と燒つと世と事と神代と和國を燒はじ
 たる事とつと是皆例乃方便事とつとつとあつと人成人の

子をりてつらつら男十六七はつとて家業に由断せ
 律義一箇一向心代れ門徒宗をととつと親乃とつと
 二つとせ書とりつと夫婦中つと二世乃友一連とつと
 せつとび女方つと乃つとつと律宗入とつとつとつと
 つとつと戒をたつと戒の梵借は尸羅とつと唐よ
 性善とつと戒とつと和訓は戒とつとつと惡事を制す
 法事つとつとつとつと法をたつと林示制とつとつと
 清くつとつと佛界とつとつと教つとつとあつとつと
 つとつとつと自傍乃心とつと人をつとつとつと他宗とつと
 つとつとつと承承乃貴あつと奉門徒宗とつとつと

皇姑乃躬候大事と信んせしむる佛壇のびをうして
笑ふ悪事を制さるるといふ戒法に書乃身やしして
又隨つて心すく不孝を不孝と思つても見よみていん
とて夫乃云ふ何を知てと屍に字と度重たきを
うるされば教とく律傍乃外天地のふり人なるもの
たれと一解に思ひ極る心く其法原が事事なる
何もくといふほど此事に隨ふて是を貞女と云ふ

○蒙古

人皇三十六代皇極天皇即位元年六月天下大旱

一乃種枯力民渴よのを多作傍徒乃事の三十代
欽の天皇に御宇よと始て来朝し三十四代推古天皇の
二乃あつて傍八百十六人尼三百廿八人ありと云皇極天皇
乃所あつて弥和迦れ徒多くと云ふ有驗乃傍を多と
召して雨と祈りしは一滴も下ど天子甚歎思召す
帝れ御自南測乃川に御幸ありて四方を拜し天神
地祇に祈らるるひいふ事所は雨と云ふ事五月詔民万歳
と云ふ又日本にありての大率人皇九十代後宇多乃院
御宇鎌倉將軍の惟康公執權の相模守平九郎宗弘安四年
七月異國太元乃蒙古日本を攻めんと向刺平范文虎斬

風傳 卷下

都法本丘四人を大將軍として其勢十万人兵船六万艘をも
平壘に泊りて人教乃手分を定むりててててててててててて
日本國を悉くせんといふと國々へまへけまへ儒者を佛者も
國に生きたるもの男女老若著持やりの者たまた唐人乃味方
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
海岸に柵とてとて柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵柵
て射るに蒙古の船は掛金をうけてうみ合せ其上は板を
りきり人馬のかけひれ自由とて鐵丸乃鞠の大さほどころり
火を操入空を飛せたりけり攻めあはる池原田松浦人々
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

禁裡仙洞を初奉兩六波羅大に法寺法公に作て大法
秘法殘方たよく執行とて華嚴阿含法宗三傳淨土門
徒の弥陀利劍此法日蓮宗ハ陀羅尼品顯密此二宗と
云に及ぶとて復摩此煙立止ひするも鑄針錫杖花の
音暫くも絶む何ぞ教國乃皆にうる事やまはれは
まもも由りまはれ法宗一同に心を合せ膏髓丹誠を
ろろし眞實心乃大洋黒煙を立身命を捨てて夜朝と
祈らる候勢賀茂石清の平野春日松乃尾をくも奉
日本國中乃神祇の勅使をまもる奉幣祈願を
御信心を傾きしに法社乃神殿鳴動く或神馬

風傳 卷下

あせのり或宝殿乃御戸用て白雲たるじれ或白羽乃其前西
 に飛り滅し神國乃驗末代といふのありしるる靈験を
 ろるし同八月朔日平れり倭は大丸吹おろし海上大波
 せしる叢古ヶ教乃船與合せしる樹金同より右
 往左往よれりしるる石巖にありし浪にうき唐人
 悉海底乃みらどとちりて張百たといふ者されしり
 のり三万人くらりて命たさる博多乃沖に漂しと目
 本勢同じし七日にわたりて干圓莫青吳方三人
 と太元はかくし殘者としとくお教しぬ勢丸の
 社を丸乃宮とあらさせありけり事とあり日本

國乃人の心いふよりしるるるるるるるるるるるるるるる
 たく之ととのものるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 とのありしるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 世のいふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 来し事ハ日記軍書子とて乃持る年代記とあり
 是れもるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 とそりしるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 乃に武官と見ゆる毗沙門天塔と度同持國とあり
 教乃不動愛染とて一軍を率也聖大將親迦弥
 陀乃庵ちりて下地せりしとて役行者此軍具

つれづれと古紀と見之りし事

○ 田舎

さう元禄乃比知はる人草深行回舎(すうをけるは)さ
らく遠るせし内に隣ある屋は男女四人の声して京
乃室町二条を忘ちていつたうの不審てありて尋
しう六八にありて公箱乃た今身まのさうさう
つれづれとて室町乃分限しやに生ますときびるや臨
終乃一念の五百年をひくと釈迦佛乃説きしと名り
めまどろきほとのる福貴は生まるは空傳(一)の

極采すの目と見之る室町と行がよ方とこのふ
傍ぐく俳好乃人へのゆはちうとてうらるる

○ 文盲

遠國よりとせしる医者れありし心やまらん人ありて京
に住居せしと遠分世活うとて申知はる所は病人
のあつて毒くせしれ身伴ひ汗に医者充乃入居とひ
待合とるにありし人其医乃やどもわらうるまが
何とぞ知をあらうとて目外六條の病人のこゝろも腹
よれと申すひれおちくおちくも三日の内心えちるる

作らば松原乃内方ハ皆檢らまうと申ぐらう
 との血見を割きと合せしごとと換投とを彼
 ちと氣つて六葉乃病人ハ初て見せし
 て馬帝ガ惡松原ハ病家此門口にて搦目
 ちるるとちしと占て進せしが海に見し
 ぶ業原さる乃いぐと三度まで一とらる
 んと波とと辭りてるそついでにげもあ
 えて傳ひし人遊海しとつや。又ちれば
 人あそ一家乃中よりさる老医と傳ひ
 素人ハ不業内ちるをばむらう。後その

りて傳へらまう青のや疾ハ四百四病
 盤くと乞ふす指せハ四百四とねりて
 病ハ祈禱のあを疾なりといひて彼等
 とつや。医書に針灸業乃例ハるこつや
 そまこれ請取のまそ祈禱乃事かとい
 ちと物知さる人のつまを原民の何某
 ちと医ハ病人もそ業をあそむに半
 祈禱ちる頼しとつや。坊と合療治ハせぬ

風ノ傳 卷下 十一

とて合あしううさしさきとまひひううさしさししとといいとと頼頼せ

○ 人々考

或人今病人をそおをを采采ふ何何ままととううずずととららせせありりとと同同
ううささ乃乃人人各各てて古古人人をを補補れれ補補たたるるをを知知てて浮浮乃乃補補ととううとと
知知ささとと云云きき一一のの苦苦寒寒たたるるをを体体ほほううひひてて病病をを治治ささるる
人人ととううずずとと云云くく一一ののいいづづにに又又もも人人にに當當せせ乃乃天天医医達達
捨捨くくままししとと云云僕僕はは医医者者ののあありりままししもも多多くくささももババ何何をを
そそとと定定まましし上上のの一一僕僕位位のの人人乃乃二二三三年年このこのううののううののうう
位位ののううののううののううののううとと頼頼せせよよとと云云ふふ是是をを医医乃乃運運

ののよよれれ可可ままりり其其運運ははひひううささししてて病病人人をを使使氣氣ままししとと云云
ししももととままささししたた事事ははやや又又あるる人人煩煩つつてて其其身身不不相相應應乃乃
人人多多すすののううののううとと云云ふふとと後後代代銀銀をを多多くくとと云云ふふ
すすとと云云ふふとと自自滅滅せせししとと云云ふふ又又他他はは小小二二三三兩兩乃乃身身上上
とと云云ふふ一一ののいいづづににははももとと云云ふふとと受受けけももとと云云ふふとと生生とと
てて與與ええるるももとと云云ふふ酒酒れれ二二にに肉肉食食度度ををたたししとと云云ふふ
とと脾脾腎腎浮浮ととううとと云云ふふとと中中にに癰癰乃乃死死ややとと云云ふふ
多多すすとと云云ふふととああまま小小一一年年乃乃高高貴貴にに止止てて人人多多代代
六十八貫目始終に出しとてそのを死行家成と書き書し
ちるんぐにたうとてうれぬあひくとこのや史傳人へが何

風ノ傳 卷下 十一

之命ハ父母ト受テ大世ノ命ト受ケル也。是レ
二丁ウヨリ暮クニシテ流ク事アリ。ハトモ生通
まじ命アリモあツテまじ症アリ人參ト用極テ本
し清取平取ト出テし医有クモ其身相應レバし
し弱トスルモし弱少モし弱トスルモ人參ト止テ生命
と天ニサスルハしたしひ生延し多しトモ親先祖し入し
え書アリしうしれしちしんしをし何し乃し益し多しトモ生延死しトモ
ひ流ク事アリしんし目し前し素し人しハしハしハしトモし天し地し
中穴し室し之しゆしなしんし神書し以し寛座しハし神道し乃し大幸し以してし生宛
ハし神道し乃し小幸し也しトモし侍しトモし也し

終

風傳枝

和訓鈔云道者身之血也蓋無似生
而保亡不可須臾離之謂耶在我
却之君子能知其所以然者必與之
行事而不強之也言故之部之書
記之強而不強之也言故之部之書

竹書紀年
 卷之六
 中

年夏曝家昏於南簷偶有書
 向井子來執風傳其後以請擇
 余曰是失君子所擇而平澤猶存嘗
 遭命我死則擇以行于世余受命未能
 其若平素乎此命也幸矣子其擇焉
 余亦相見失君子於泉下之日有石

後命哉蓋此書之三部之例而紀事
 跡者耳遂為之跋以與焉

元文己未仲秋望日

撰大坂石角堂幸人跋

書林
 大坂新町西口小濱丁
 向井八之郎版

